

再生産労働力としての国境を越えた人の移動

——既存研究のまとめ——

石井 香世子

1. はじめに

本稿の目的は、家族形成を目的とした国境を越える人の移動をめぐる議論のうち、特に経済規模の比較的小さな国から、経済規模の比較的大きな国へと家族形成のために移り住んだ女性をめぐる議論に焦点を当てて既存研究を振りかえり、社会学的な分析の課題を検討することにある。

今日の日本では、膨大な量の「定住化する外国人」に関する研究が行われている。それらの議論の主流となっているものは、「グローバル化に伴い、日本に定住化する外国人が増えている。彼らが市民として住みやすい地域社会をつくれるかどうか、日本社会が十分に国際化されているかどうかが試されている」といった視座の上に立っている。これらの議論に十分な説得力をもったものが多いとしても、翻って考えればこの議論の方向性は、「来てしまった者を追いつ返すのは非人道的」「日本人よ、国際化社会¹⁾にふさわしい感覚を持って」といった類の、多分に日本社会へ「寛容」「良識」を要求するというといった姿勢を持っていると見ることもできる。これは、日本に新しく住もうという人と日本社会に以前から属していた人との間の格差を指摘するかに見えて実は、ヒエラルキーの上塗りをしている可能性さえあると見ることもできないだろうか。この点は、あまりにも多くの研究がこの視座を前提としているために見過されているので

はないだろうか。本稿では、こうした議論を補完する可能性のある、現在の議論の遡上から取りこぼされている側面について検討する。

この点を考える上で最適な例のひとつと言えるのが、欧米や東南アジアを中心に、多様な議論が展開されつつある、家族形成を目的とした国境を越える人の移動に関する議論である。この中でも特に、経済規模の比較的小さな国から、経済規模の比較的大きな国へと家族形成のために移り住んだ女性をめぐる議論に焦点を当てた既存研究では、さまざまな角度と枠組みからの研究が行われている。家族形成のための移民といった場合、既存研究はこれを主に3つのケースに区分して考えている。1つめは、もともと成立していた家族のうち誰かが先に別の国に移民し、呼び寄せられた家族が家族再統合のために移民するパターン (Kofman 1999)、2つめは、比較的经济規模が大きく労働市場が豊かな国へ移民して働いていた若い男性の妻となり家族形成することを目的に、男性の出身国の若い女性たちが(多くの場合組織的に)移民するパターン (Alicea 1997; Chin 1994; Lievens 1999)、そして3つめに異なる地域出身の男女が、配偶者となることを目的に男女どちらかの出身国もしくは第三国へ移り住むパターンである (Gorny and Kepinska 2004; Piper and Roces 2003; Truong 1996; Wang and Chang 2002 など)。こうしたパターンの分け方には様々な基準があり、上述の区分自体の問題性もあるが、

1) 筆者としては「国際的」「国際化」といった言葉の意味が全く不可解であるが、既存研究の中に「国際化する日本社会」(梶田・宮島 2002)「国際化する地域社会」(池上 2001)という表現が多いため、ここでは国際化の語を引用として用いた。

暫定的に本稿では、上述のうち第3番目のカテゴリーに焦点を絞り、その中でも特に移住前に第三者による金銭上・イメージ情報交換上の仲介があった場合に焦点を当てる。この事例こそ日本における移民研究を別の角度から検討する可能性を模索するのに最適な例と考えられるためである。

2. 「国際化された市民社会日本」と「国際結婚」に関する議論

「国際結婚²⁾」をした夫婦を、日本社会がいかに受け入れていくかが、日本社会の国際化の度合いを示している——といった類の主な報告としては、『講座 外国人定住問題』の中で「国際結婚の現状——日本でよりよく生きるために」を表した石井由香(石井1995)、『国際社会 変容する日本社会と文化』の中で「国際結婚にみる家族の問題——フィリピン女性と日本人男性の結婚・離婚をめぐって」を表した定松文(定松2002)、『講座 グローバル化する日本と移民問題』の中で「国際結婚と家族——在日フィリピン人による出産と子育ての相互扶助」を表した高畑 幸(高畑2003)、そして *Wife or Worker?* の中で “International Marriage through Introduction Agencies: Social and Legal Realities of ‘Asian’ Wives of Japanese Men” をあらわした Nakamatsu Tomoko が挙げられよう³⁾。

石井の報告は、「たまたま国籍の違う男女が

結びついただけのことであるのに『国際結婚』と特別な呼び方をされること自体」に反映される、国際カップル⁴⁾にとって居心地のいい場所であるとはいえない、日本社会で国際カップルが抱える問題について検討している。石井は、1990年代に入って、ニューカマーと呼ばれる外国人と日本人との結婚が増加している点を踏まえ、①日本人男性とフィリピン女性が結婚したケース、②パキスタン、バングラディシュ⁵⁾、イラン出身者を中心とした、ニューカマーの外国人男性と日本人女性とが結婚したケースを中心に、「定住」への自助組織の形成を調査している(石井1995:75-102)。石井によれば、ニューカマー外国人と日本人が結婚した国際カップルには、「目に見える法律的問題」と「目に見えない差別問題」があるという。1990年代に入り、法律は少しずつ整備されているものの、「差別」の問題、地域社会の受け入れに関しては、まだ改善されるべき点が多いという。しかし、1990年代にはいつてから、国際カップルの当事者たちが、主体的に、自然に日本社会に関わっていくとする動きが出てきているという(石井1995:96)。この当事者が中心となった自助組織とは、活動の重点を日常レベルの活動に置いていることが特徴であり、国際カップルの間の子育ての情報交換、地域社会への異文化紹介や国際理解への努力をするなど、問題解決型というよりは自己実現型とでもいうべき組織だという点が指摘されている(石井1995:

2) 嘉本は、「国際結婚」という概念は日本産であり、「International Marriage」にあたる言葉は西洋社会にはないと指摘している(嘉本2001)。「国際結婚」という語と概念に関する検討は嘉本2001参照のこと。ただし筆者は、西欧社会にない言葉と概念を、日本語論文の上で使うことを躊躇する必要性を何ら感じないため、本稿ではあえて嘉本の指摘する問題点の重要性を踏まえた上で、この「国際結婚」という語を使うものとする。

3) ドキュメンタリーとして書かれた同様の主題の書籍には、上述の研究論文よりも認知度が高い、桑山紀彦の『国際結婚とストレス——アジアからの花嫁とニッポンの家族——』(1995年 明石書店)や、宿谷京子による『アジアから来た花嫁——迎える側の論理』(1988年 明石書店)などが多数存在する。しかし、ここでは移民研究の文脈で書かれた研究論文の傾向を知ることが目的であるため、書籍の範囲を限定して扱うものとする。

4) 石井1995本文中からの引用語。

5) ただし石井の原文中では「バングラデシュ」と記述している(石井1995:89)。

92-93)。

その活動の根幹にあるのは「日本社会の中で相互理解を深めていく」という、「定住」志向の中でよりよく生きていこうとする意志であるという。石井はこうした自助組織の活動に関して、以下のように締めくくっている。

「国際ママ」が日本社会で自己実現をはかっていくという、運動と肩ひじをはるのではない、同世代の日本人女性とも通じる「フツウ」感覚がそこにはあるように思われる。… (中略) …自助組織の形成は首都圏においてはすでに現実のものとなっている。こうした組織の活動が今後どこまで地域社会に受け入れられるか、また言葉や資金の問題などを乗り越えて、どこまでこうした組織が活動を継続できるかは、外国人の「定住」に対する日本社会の態度をはかる、一つの指標となるのではないだろうか (石井 1995 : 96-97)。

高畑もまた、日本人男性と結婚したフィリピン人女性の間を生じつつある「出産と子育ての相互扶助組織」を紹介し、「日本社会が、あれらの声を受け止め続けること——これが何よりも大切だ」として、具体的な「サポート体制を整え」るための提案をしている (高畑 2003 : 287-290)。

しかし、彼らの結論からは、①子供の外見が周りの子供と違うために「問題」に直面している石井の言うところの「国際カップル」が、「フツウ」感覚を持つとすることが、なぜ『ダブル』の子供が差別は偏見に負けることなく健やかに育つこととつながるのか、②そもそも外国人の「定住」に対する日本社会の態度をはかるというとき、そのはかる主体は何／誰なのかが明確にはされていない。そして何より、ここには他の多くの移民研究と同じく、「もう既に日本で結婚し、定住を志向する『国際カップル』への法的・日常的な差

別の問題を改善すべく、地域社会は自助組織の活動を受け入れるべきである」とは述べられていながらも、それでは、なぜ地域社会は彼らを受け入れるべきなのかは、まるで所与の前提であるかのごとく明記されていない。この点に関して、もしも地域社会の構成員の中に「彼らが勝手に来たのだから／結婚したのだから、なぜその責任を地域社会が担わなくてはならないのだ」という意見が出た場合、「日本社会の国際化の度合いが問われている」というのは、果たして有効な回答となるのだろうか。そもそも、日本社会の国際化の度合いを評価するのは、何だと想定されているのだろうか。

また石井は、「(一部の日本人男性が持つ)結婚相手として選んでおきながらぬぐいきれないフィリピン人女性への蔑視」を、結婚後に起こるさまざまな問題の理由のひとつとして指摘している (石井 1995 : 86)。しかし逆の見方をすれば、そもそも、その結婚は国家経済規模の差に基づく蔑視と、それに対となる何らかの感覚がなければ成立しなかった結婚だった可能性も否定できない。石井自身もこの点を認識していると思われる箇所がある。石井によれば、第二次世界大戦後までの日本は「貧しく、アメリカの生活にあこがれて、また経済的な理由から外国人との結婚を選択した [日本人] 女性も多かったと見られる。… (中略) …しかし、1970年代に入って、状況は変わり始める。行動経済成長期を経て、経済発展を遂げた日本は、周辺のアジア諸国に対して経済的に優位となり『憧れ』の対象となったのである」(石井 1995 : 80-81 カッコ [] 内筆者による補足) という。つまり、「たまたま国籍の違う男女が結びついた」場合だけではなく、格差やイメージが存在するからこそその結婚が成立する場合もあるのではないだろうか。さらに言えば、一方で経済格差や「憧れ」といったイメージが作用している結婚であるという認識を持つ研究者をして、

一方で「結婚相手として選んでおきながら蔑視している」という言い方をさせる、「結婚」というものに対する画一的な規範イメージこそ、「本来(対等な男女間の愛と自由意志に基づいて?)結婚は成立すべき」といった規範を再生産してしまうのではないだろうか。これでは、「より高い生活水準を求めて/家族への送金のための外国の男性と結婚した」といった例を逸脱と見做す、もしくは存在しないものとして一方で隠蔽しながら彼女たちの擁護論を展開するという矛盾に陥ってしまう危険性があるのではないだろうか。

また、これも日本人男性と「見合仲介業者」を通じて結婚したフィリピン出身女性の、日本における自助活動に注目した Nakamatsu は、見合い結婚で日本へやってきたフィリピン出身の女性たちに関して、「はじめはメール・オーダー・ブライドとして移民した女性の、妻として、母として、市民としての側面に目を向ける必要がある」と指摘する (Nakamatsu 2003 : 196)。既存研究では往々にして「人身売買の商品」や「可哀想な被害者」として議論の遡上に乗せられがちな、フィリピン出身の妻たちは、妻であると同時に母であり、市民であり、家の外の社会での自己実現の機会を求めている多面的な役割をもった社会的な存在だという。Nakamatsu は、こうした存在であるフィリピン出身妻たちにとって、帰化しなければ一家の戸籍にも入ることができない現在の日本の国籍・戸籍制度はおかしいと指摘する (Nakamatsu 2003 : 196)。帰化して「日本人になる」ことは、フィリピン出身妻たちにとって自分たちのアイデンティティを侵すものであり、日本文化に同一化させられることを意味するという。そこで、フィリピン出身妻たちの「フィリピン人であること」を残したまま、日本で妻として母として、社会で働く人間として十分な資格を享受できる「市民権」の概念が日本にはないところが問題であるという (Nakamatsu 2003 : 181-196)。

さらに Nakamatsu は、もし市民権の問題が解決したとしても、日常的な蔑視や差別がなくなることには問題は解決されたとはいえないという。Nakamatsu は、日本に見合い結婚でやってきたフィリピン出身女性の中の、フィリピンで高い学歴や職歴を持っていた女性の例を挙げ、彼女たちが日本社会では限られた職種にしか就くことができないことは、“市民としての彼女たちの権利を保障していない”と指摘する (Nakamatsu 2003 : 192-194)。また Nakamatsu は、積極的に日本社会で役割を担おうと活動している学歴の高いフィリピン人女性の事例等を示し、そうした自助活動をサポートできるかが日本社会に問われているという (Nakamatsu 2003 :)。

定松もまた、日本人男性と結婚したフィリピン出身女性が日本で生活していくうえでの法律上の障壁について検討し、「フィリピン出身女性たちの職業間移動について可能性を広げておく必要がある。…(中略)…いわゆるニューカマーの外国人たちが定住化していく時代には、どのエスニック集団にも職業選択の実質的な可能性がひらかれている社会になれるのかが問われるのであろう」と結んでいる (定松 2002 : 63)。

この Nakamatsu らの議論は、Piper や Roces らの議論の流れを汲んだものだと言える。ジェンダー論の視点からフィリピン出身女性移民について論じる Piper や Roces は、欧米で博士号を取得し、欧米の大学で教鞭を取っている場合も多い東南アジア出身の女性たちである。彼女らは、「フィリピン人女性は誰もが、外国出身の男性と結婚するのに金目当てだというわけではないのである」と強調し (Piper and Roces 2003 : 11)、「これまで論じられてきた惨めで哀れな性産業従事者やメール・オーダー・ブライドというフィリピン人女性移民という議論に辟易し (Piper and Roces 2003 : 3)」「フィリピン人女性移民の中にも、高い学歴を持った人や、出身国で高い社会階層にあ

る人、純粋な恋愛で結婚する女性だっている (Piper and Roces 2003 : 3)」という。そして、「東南アジアからの女性移民の多面的な側面」に目を向ける必要があると指摘する⁶⁾ (Piper and Roces 2003 : 17-18)。彼女たちは、「なぜフィリピンの女性はそんな形で移民にならないかなければならないのかを延々と議論するより、どんな理由であれ移民した女性が、メール・オーダー・ブライドであるだけでなく、同時に新天地で夫を持つ妻であり、子を育てる母であり、現地社会に積極的に関与することもある市民なのである」という (Piper and Roces 2003 : 17)。ここで Piper と Roces は、オーストラリアのある町へ渡ったフィリピンの女性たちが、町の文化祭でフィリピンの踊りを踊っていることを引き合いに出して「地域社会に貢献している、先進国で市民として生きるフィリピン出身女性」の姿を指摘し、母として・妻として・市民としてのフィリピン人女性の姿に光を当てる必要があるという (Piper and Roces 2003 : 6,18)。

しかし、こうした東南アジアのエリート女性研究者による「フィリピン人女性は、誰でも金目当てで先進国の男性と結婚すると決め付けるのはおかしい。留学先で対等な学生同士として異国の男性と出会い、純粋な恋愛に基づいた結婚をするフィリピン出身女性も存在するのだ」という主張の流れは (Piper and Roces 2003 : 11-13)、近年の日本人研究者が指摘する「日本で主体的に地域社会への関与を始めつつある力強いフィリピン出身女性」や「最初のきっかけは何であれ、やがて夫婦の努力で真の愛をはぐくみ、幸せな生活を送っている女性」の存在を指摘するという傾向と方向性を同じくするものではないだろうか。

Nakamatsu, Piper や Roces の議論はたしかにもっともな意見である。しかし、これらの

議論が拠って立つ視点には、依然として危険なものが入り込んでいるのではないだろうか。上述いずれの場合も、もちろん有意義な議論ではあるが、それでは、「金目当ての結婚をした女性」が皆無であることが立証されない今日、この女性とその配偶者の身の置き所はどこになるのだろうか。

ホスト社会によって「フィリピン人女性」「アジア人女性」として概念化され、周縁化されている人々のうち、社会的責任や自己主張の資源を持っている人々が、「フィリピン人女性への偏見」と正面から向き合う前に、「私は蔑視されるカテゴリーには入っていないはず。一緒にしないで」という意見を発信し、それをホスト社会の研究者が「明日への力強い動き」として希望観測的に書くことに終始すれば、問題は解決へ向かうどころか、周縁化された人々の分裂と差別の入り子構造を複雑化させるだけで、問題の本質的な解決の糸口にはなりにくいのではないだろうか。

またこれと同時に、ホスト社会に属する日本人研究者らによる「地域社会に積極的に関わろうという主体的な活動をはじめた外国出身妻たち」の活動を紹介・賞賛する研究も、これと同じ危険性を持っている可能性があるといえるのではないだろうか。もちろんそれらの研究の意義が大きいことは言うまでもないが、あまりにそれだけに偏りすぎると、ホスト社会側の偽善と隠蔽と見ることもできるのではないだろうか。いずれにせよ、昨今の研究に多い「彼女たちの地域社会に溶け込みつつある」という主体的な活動を受け入れられるか日本社会が試されている」といった議論には、「なぜ」の部分がいまのまま取り残されている。そこでは、高い生活水準の教授や家族への送金を目的とした結婚をした女性を純粋でない結婚、本来のありようで

6) 他に同様の視点からの研究に、Bhabha and Shutter 1985 ; Breger 1998 ; Chuah, Reid Smith and Rice ; Roces 1996 などがある。

ない結婚という状態で議論しているという点では変わりがない。彼女たちの価値観は否定もしくは無視されたままなのである。

3. 「女性の商品化」に関する議論

この危険性を内包したまま議論が展開されているのが、多くの「女性の商品化」を論点に展開されている既存研究⁷⁾であると言えるのではないだろうか。たとえば、日本人男性とスリランカ出身の女性が結婚したケースについて扱い、「アジア人花嫁の『商品化』」を著した中村尚司の議論（中村 1994）や、さらに台湾人男性とベトナム人女性との結婚に関して「国際結婚の商品化」を論じた Hong-zen Wang と Shu-ming Chang の議論などがこれにあたる可能性がある（Wang and Chang 2002）。

Wang と Chang は、台湾人男性とベトナム人女性の「見合結婚」を仲介するブローカーの仕組みと役割について詳細に調査し、ベトナム人女性の商品化のメカニズムが生まれていると指摘する。Wang と Chang によれば、台湾が経済発展して女性の社会進出が進んだ結果、社会的地位が高い女性が増え、それと同時に、社会的・経済的に劣位に残った「結婚してもらえない女性が増える」男性が増えた。その結果、台湾より経済規模の小さな国から妻を調達するブローカーができた。台湾の見合いブローカーは、言葉が通じビジネスをしやすいベトナムの華人系ブローカーと連携して、花嫁候補の発掘をする。しかし逆に、ここで探される花嫁候補の女性は、華人系でないベトナムの農村の若い女性たちであるという。なぜならば、女性が言葉を理解し、状況をよく認識してしまったり、女性が男性と同じ華人系のエスニシティであると、そうでない場合に比べ女性の立場が強くなり、「話がまとまりにくくなる」というのである（Wang

and Chang 2002: 104）。わざわざ言葉が通じない相手、意志の疎通ができない相手を選んで見合いさせるというこのブローカーのやり口は、まさしく人の商品化であると言う。Wang と Chang によれば、こうした見合い結婚は、第一に、ブローカーが存在しなければ出現しなかったという意味で女性の商品化の過程であり、第二に、こうしたブローカーの数が増え、ブローカー産業の中での競争が激しくなった昨今では、女性の「値下げ」や「教育」など、商品価値を高めることが始まり、ますます「女性の商品化」が進行していると指摘している（Wang and Chang 2002: 109-110）。こうした商品化の議論はいずれも、女性が男性（社会）側の必要に応じて、結婚相手という商品として移民させられているという点を指摘している。たとえば、日本の「農村花嫁」について論じた中村は、以下のように、移民先での女性の権利の保障の必要性を指摘している。

日本の農村に定住した花嫁たちは、生まれ育った環境や社会から切断されている。言葉や習慣もわからず、孤立しがちである。…（中略）…なによりも必要なことは、日々の困った問題を相談できる場をつくることであろう（中村 1994: 34-35）。

しかし、この後に続く部分で中村は、コンピュータ研修という新聞広告に応募して、実際には50歳を超えた日本人男性との結婚を強要されたスリランカ女性が、半年後に離婚届への署名を求められたところ同意せず、一時帰国したときに偽造して出されてしまった離婚届の無効確認を求める訴訟と損害賠償を求める訴訟を起こした女性の例を挙げている（中村 1994: 35-36）。

7) この点について検証したものに、Adkins 1995; Cahill 1990; Cooke 1986; Delphy and Leonard 1992; Glodava and Onizuka 1994; Robinson 1996; Roces 1998; Wijers and Lap-Chew 1997などがある。

もちろん、この女性の当然の権利を守るための訴訟の正当性は疑うべくもないが、ここで何か府におちない疑問が残ることになる。騙されて嫌々ながら結婚されたのならば、その解消を断固として固辞するのはなぜなのかという点である。ここには、出身国社会の家族やコミュニティが彼女に与える影響故の女性の立場があると見ることはできないだろうか。

中村は以下のように言う。

その課題の根底には、アジア人花嫁が「商品」として扱われている事実がある。あらゆる社会関係のなかで、男と女の関係は、もっとも人間的であると同時にもっとも自然な直接性を、あわせもっている。この直接性を「商品」という媒介性で置き換えようとするビジネスには、根本的な無理がある。…（中略）…彼女たちを商品として扱いつづけるか、それとも明日の社会を築く共同生活者とみなすか、日本社会そのものが問われているのである（中村 1994: 33-35）。

では、(国際化にまだ適応できていない?) 日本社会が変わり、「アジア人花嫁」を受け容れるように変われば、問題は解決するというのだろうか。

4. タン・ダム・トゥルンの再生産労働力の商品化論

「国際化が進んでいない(?)」日本社会な

どホスト社会側の問題⁸⁾が解決され、「アジア人花嫁」を受け容れるように変われば、問題は解決するというのだろうか。いや、問題は、もっと広く、根深いところにあるのではないだろうか。まず、経済規模の小さい国の出身者と、経済規模の大きな国の出身者との間の結婚と、それに伴う問題の指摘は、けっして日本と「アジア人花嫁」との間に限ったことではない。日本に「アジア人花嫁」を供給しているフィリピン、スリランカといった国々は、同時にアメリカ、カナダ、オーストラリアといった欧米諸国にとってのメール・オーダー・ブライドの供給地である場合がほとんどである⁹⁾。逆にこれが意味するところを考えれば、フィリピン社会にとってみれば、日本社会で「見合い」と呼ばれているシステムが西欧文化圏では「メール・オーダー・ブライド」と呼ばれるだけの違いであることは、フィリピンの「メール・オーダー・ブライド」への禁止法令が、日本の「見合い」も自動的に禁止していることからわかる。また、旧ソ連圏は、欧米諸国への女性の重要な供給地となっている（Gorny and Kepinska 2004）。

こうした事象は、今日、移民研究が常套句として用いる「グローバル社会化¹⁰⁾」以前も存在していたことも研究されている¹¹⁾。田村雲供は、19世紀のドイツでは、ドイツ保護領におけるドイツ人兵士たちが、コイ人（当時は西欧人にホッテントットと呼ばれていた南西アフリカの住民）や中国人、日本人といった原住民女性¹²⁾との間に混血児誕生の危険を犯すのを避けるため、若いドイツ人女性を、結婚・定住を目的に植民地に送り込んでいた

8) この点を詳しく議論したものに、Piper 1997などがある。

9) ただしフィリピンは1991年にメール・オーダー・ブライドに対する禁止法令を制定したため、今日では日本を含めた各国への「花嫁」の移民は少なくなっている。

10) Chai 1999; Parrenas 2001a; Peper and Ball 2001; Peper and Rocas 2003などが、グローバル化によって女性の移民が増加・拡大した点を、指摘している。

11) 例示した田村の他に、Chai 1992; Makabe 1995; Nakano Glenn 1986など。

12) 田村の原文 p. 283からの引用。

事例を示している（田村 1992:270-310）。このとき、植民地は地元住民との戦闘状態に晒されていた期間も長かった。またそこでの生活は芸術・サロン・社交界とは無縁で、農業・牧畜・家禽飼育といったパイオニア労働を夫とともに行うものであった。こうした主婦やその主婦を助ける女中には、田舎出身で農業労働の経験があり、健康で自己主張の少ない、義務感が強く体格のいい女性選ばれたという（田村 1992:288）。こうして送られる女性たちは、ドイツ市民社会の中で下層に属する女性たちが主で、当初は「[ドイツ本国の市民社会に比べて] 比較的拘束の少ない、可能性をもった領域を植民地に見出ししていたとみることができる」という（田村 1992:284 ただしカッコ [] 内筆者補足）。こうした女性たちの仲介を担っていた植民地の地区長官の妻も、本国の女性募集担当機関へ向けて、「植民地への移住を志望するものは質素で、しかも積極的に働く女性でなければならず、2-3年で大金を稼ぐことができると期待してくる女性は不適格であると強調している」という（田村 1992:291）。ここからもまた、経済的な格差を前提とした植民地行きのケースが存在していたことがわかる。

さらに、こうした若い女性たちを短期契約労働者として植民地に送りこみ、実際にはその間に保護領にいる独身の兵士たちと結婚することを期待されているシステムが存在している点などは（田村 1992:288）、1980年代以降に日本の地方行政体が行ってきたシステムと基本的には同じ構造を持っている。つまり、こうした現象は地域的にも、時代的にも、今日の日本に限った特殊な問題とばかりは言い切れないのである。これは言い換えれば、「日本社会の国際化の未熟さ」を指摘すれば根本的な問題解決につながるとは限らないということではないだろうか。

この点をより巨視的に鋭く切り下げたのが、Thanh-Dam Truong である。彼女は Cross-border

Marriage、家事労働者、未熟練サービス労働者、性産業労働者等をまとめて、再生産労働者（reproduction workers）として概念化した。そして、再生産労働者の居場所をつくることで、彼女たちの権利を守るべきだと主張した。Truong によれば、再生産労働力とは、(1)人間の再生産、(2)「再生産経済」「性関連サービス」「養育・介護経済」「人材の再生産」と呼ばれるような人類の維持(3)制度化された再生産、たとえば特定の社会システムの維持再生産、のことをいう（Truong 1996:33）。Truong の分析によれば、いちはやく工業化を達成した先進工業諸国では、女性の就労構造が変化し、女性が労働市場へ進出したために、この再生産労働者が不足するに至った（Truong 1996:35）。また、これとほぼ同時進行して、世界的な製造・流通・金融・技術・メディアといったシステムの機能がはたらくようになったことと、グローバルなサービス産業の社会への浸透によって、性産業を含むありとあらゆる個人サービスが産業化の文脈に乗るようになった（Truong 1996:36）。これら2つの要素が、先進工業国で不足するようになった再生産労働力を外部から補充する流れをつくったという（Truong 1996:40-41）。

一方でこうした女性たちを送り出す国の側では、これらの女性たちが出身国の家族へ送金する外貨を、外貨獲得手段の一環としている側面もあるが、こうした女性たちの移民先での保護のために何かの対策を講じる場合は少ない（Truong 1996:43）。そして、性産業に関わるモラル面のマイナス・イメージによって、これらの女性は周縁化（marginalize）されるメカニズムができあがっているという（Truong 1996:43）。このネガティブなイメージを投影されるために、再生産労働に携わる女性たちの間にはまとまりをつくるのが難しく、彼女たちの立場をますます周縁化しているという（Truong 1996:45）。Truong によれば、国際労働条約は再生産労働者の概念を

まだ持ち合わせておらず、そのため、これらの女性たちの権利を保護する基盤ができていないという (Truong 1996:44)。Truong は、国際労働条約や各国の法基盤が、こうした再生産労働者を労働者として認知し、権利保護の基盤をつくることが望ましいと指摘している (Truong 1996:44)。さもないと、こうした職種の女性を、社会が構造的にダンピングしているというのである (Truong 1996:47)。

この Truong の議論には様々な指摘が存在する。それらの中で Cross-Border Marriage で移民した女性と性産業従事者を「一緒にすること」の難しさの指摘がある。どこで、再生産労働と“純粋な”結婚との線引きをするのか」という問題である。しかし、実はこの問題設定自体が、実はもっとも大きな問題性を孕んでいるのではないだろうか。

5. おわりに：残された課題

以上に見てきたことから言えるのは、まず結婚というシステムを通じた女性の商品化を指摘するのであれば、男性もまた、女性によって商品化の遡上に載せられていると見ることはできないのだろうか。中村はスリランカの少女による以下のような発言を報告している。

2人の若いスリランカ女性が、シンハラ語の日曜紙『シルミナ』を手にして、コロンボ滞在中の私の宿舎を訪ねてきた。「日本の医師やエンジニアが、スリランカ女性との結婚を希望しているという話は本当ですか。本当なら、私たちも日本へ行きたいと考えています」という相談だった (中村 1994:36)。

このように、既存の論者の多くが、日本人男性と結婚したフィリピン人女性との間に結婚後に起こるトラブルの主な理由のひとつは、日本人男性の経済状況に関する「双方の打算

食い違い」だという点を認識している。しかし既存研究が「女性の商品化」というとき、その根拠は、男性が女性を妻として得るために、数百万円の料金を仲介業者に支払うからであると説明されてきた。しかし、別の見方をすれば「経済的な上昇を期待して結婚する女性」と、「結婚後、期待されたほど経済的な優位性がなかったからとトラブルに巻き込まれる男性」と、どちらがより相手によって「商品化」されているという判断はできるだろうか。女性がお金に魅かれて配偶者になったために「商品化」されたというのであれば、男性もまたお金を引き出す財布として配偶者選ばれた「商品化」された存在であったと言えることもできる。そもそも、一方で女性の「商品化」を論じながら、既存研究はこれを「出会い方が不自然であったとしても、“純粋な”愛で結婚した夫婦もいるかもしれない」「フィリピンからの女性すべてが金目当てで日本人と結婚するわけではない」といった、“本来の結婚”“純粋な結婚”をした人にまで悪いイメージが波及するのを未然に防ごうとするような論調を守る傾向があった。ところが、この論調自体が、経済的な目的目当てで結婚した人を“不純な”“本来の形ではない”結婚として、周縁化する傾向を持っているとすることはできないだろうか。

日本人の研究者たちが、「フィリピン人は金目当てで結婚する人ばかりではない」と日本人の夫との“純粋で自然な愛”に基づく結婚を主張しようとするフィリピン出身妻の運動を大々的に「明日への力強い運動」と位置づければ、“純粋な愛に基づいていない”“不自然な”結婚をしたフィリピン出身妻たちは、どうなっていくのだろうか。“不純な”“不自然な”“本来あるべきでない”結婚をした者として、(直接的であれ、逆説的であれ)蔑視の対象であり続けるか、「最初の形こそ不自然に見えるが、きちんと“純粋な愛”を育てています」と主張して、自分たちの“不自然さ”

を払拭するか、2つに1つしかない。これこそ、「近代国民国家社会における婚姻概念の画一化」(Cott 2000: 226)の上に乗った議論でしかないのではないだろうか。こうした点を克服しないままの議論は、彼女たちをめぐる問題そのものの解決には何らつながらないのではないだろうか。つまり「金目当て」の結婚を“不純”だと前提しながら、その部分を宙に浮いたままに残して行く議論では、彼女たちをめぐる社会的な蔑視の構造に対して何ら抵抗力を持っていないと見ることもできるのではないだろうか。“純粋な恋愛”による結婚が、“金目当ての結婚”より“純粋”で“本来の”形だという定義づけ自体が、極めて近代西欧的な画一的な“建前”ではないだろうか。

もし「恥ずべき」だとすれば、「彼女たち」なのではなく、日本社会・フィリピンのエリート社会をも含んだ、結婚や就職への価値観の画一化に載せられている我々なのではないだろうか。結婚や恋愛を商品化しているのは、日本を含む資本主義社会そのものではないのだろうか。この“不自然さ”を隠蔽するのが、資本主義制度下における恋愛イメージの商品化である。日本の主流社会に属する人々や、フィリピンのエリートとなれる社会に属する人々の場合は、たとえ“不自然”な出会い方をした相手とでも、その後、商品化された恋愛の過程を消費していくことで、最終的には“自然な恋愛の過程”を経たとされ、商品化された結婚の過程を消費していく。その一方で、そうした商品として準備されている「自然な恋愛」の過程を消費できない人々は、“不自然な”結婚や“金目当て”と分類される可能性が高くなる。

Truong などごく一部を除く既存研究の多くは、傾向としての経済的な格差に基づいた結婚の要因を認識しながら、どこかに、「金目当ての結婚／打算的な結婚」と対置されたものとしての「自由意志／“純粋な”愛に基づく結婚」の存在を意識してきたとはいえないだ

ろうか。それは時に、「純粋な愛」にもとづいて結婚したフィリピン女性と日本人男性の夫婦への配慮という形であり、それは時に、「きっかけは何であれ、生活するうちに愛が芽生えた夫婦」に対する遠慮であったかもしれない。しかし、そうした前提を置くこと自体、「生活水準の上昇」や「家族への送金」を目的に結婚した人々の存在を否定もしくは隠蔽し続けることになる。この点を自他共に隠蔽しつづけたまま議論を掘り下げても、それはどこか「納得のいかない」不自然さを内包し、実はそれらの研究が否定する差別・偏見の素地を再生産するものになってしまう可能性が大きいのではないだろうか。

また、これまでの同種の研究では、出身国とは別の国へ嫁いだ女性は、本国社会ではなく日本社会の一員だという前提で進められてきた。しかし、この視点を前提に研究を進めることは、それらの研究者がしばしば指摘する「日本の家庭へ嫁入りしたのに出身国の家族・兄弟へ仕送りをする」ことをトラブルの発端とする日本人夫の立場を、ある意味支えることになりはしないだろうか。結婚して日本で暮らす日本以外の国の出身女性は、結婚したからと言って、出身国の家族や地域社会へのメンツがなくなるわけでもなければ、精神的・経済的なつながりがなくなるわけではない。彼女たちは、常に同時進行で2つの社会に属して生きていると見ることもできるのである。この、空間認識の枠組みを修正し、あらためて現在における彼女たちの出身地域社会と、生活している地域社会との双方における彼女たちの位置づけを、ひとつに捉えて分析することによって、新たな研究の視座が拓ける可能性もあるのではないだろうか。つまり、Pries が提起するところの「Transnational Social Spaces 概念」(Pries 2001)に基づく分析枠組みの再設定が、ここで有効なのではないだろうか。

「自由恋愛に基づく結婚」を“自然で純粋

な”ものとする前提に立つこと自体、実は資本主義制度下の「ライフステージの商品化」に足元をすくわれているということができないだろうか。そして、このライフステージの商品化とそれに伴う画一化によって、Truong が指摘している再生産労働力の商品化の議論が展開されにくくなっているのではないだろうか。つまり、上述の「配慮」や「遠慮」という名の下で、Truong が指摘した問題構造を隠蔽しているのではないだろうか。

必要なのは、フィリピン人エリート女性研究者らが反発する「貧しい国の女性を可哀想な商品化された存在」として扱おうとする「女性の商品化」論から、経済規模の大きな国の男女もともに足元をすくわれている「ライフステージの商品化」への分析視座の移行ではないのだろうか。

参考文献

- Adkins, L. 1995. *Gendered Work—Sexuality Family and the Labor Market*. Buckingham: Open University Press.
- Alicea, M. 1997. “A Chambered Nautilus: The Contradictory Nature of Puerto Rican Women’s Role in the Social Construction of a Transnational Community.” *Gender and Society*. 11 (5): 597–626.
- Bhabha, M., F. Klug. And Shutter, S. 1985. *Worlds Apart: Women under Immigration and Nationality Law*. London: Pluto Press.
- Breger, Rosemary. 1998. “Love and the State: Women, Mixed Marriages and the Law in Germany.” Rosemary Breger and Rosanna Hill eds. *Cross-Cultural Marriage: Identity and Choice*. pp.129–152.
- Cahill, Desmond. 1990. *International Marriages in International Contexts: A Study of Filipina Women Married to Australian, Japanese and Swiss Men*. Quezon City: Scalabrini Migration Center.
- Chai, A. Y. and Gabaccia, D. 1992. *Picture Brides—Feminist Analysis of Life Histories of Hawaii’s Early Immigrant Women from Japan, Okinawa and Korea*. Westport, Conn: Praeger.
- Chin, Ko-Lin. 1994. “Out of Town Brides: *International Marriage and Wife Abuse among Chinese Immigrants*.” *Journal of Comparative Family Studies* 25 (1) : 53–70.
- Chuah, F. T. D. Chuah, C. L. Reid-Smith. and Rice, A. “Does Australia Have a Filipina Bride Problem?” *Australian Journal of Social Issues*. 22 (4) : 573–583.
- Cooke, F. M. 1986. *Australian-Filipino Marriages in the 1980s: The Myth and the Reality*. Brisbane: Griffith University School of Asian Studies, Center for the Study of Australian-Asian Relations, Research Paper 37.
- Cott, Nancy F. 2000. *Public Vows: A History of Marriage and the Nation*. Cambridge: Harvard University Press.
- Delphy, C. and Leonard, D. 1992. *Familiar Exploitation—A New Analysis of Marriage in Contemporary Western Societies*. Cambridge: Polity Press.
- Ghai, Y. 1999. “Rights, Social Justice, and Globalization in East Asia.” J. Bauer and D. Bell eds. *The East Asian Challenge for Human Rights*. Cambridge :Cambridge University Press. pp. 241–263.
- Glodava, Mila. and Onizuka, Richard. 1994. *Mail Order Brides: Women for Sale*. Alakan: Fort Collins.
- Gorny, Agata. And Kepinska, Ewa. 2004. “Mixed Marriages in Migration from the Ukraine to Poland.” *Journal of Ethnic and Migration Studies*. 30 (2) : 353–372.
- Harzig, C. 2001. “Women Migrants as Global and Local Agents: New Research Strategies on Gender and Migration.” P. Sharpe eds. *Women, Gender and Labor Migration—Historical and Global Perspectives*. London:Routledge. Pp.15–28.
- Hilsdon, A. M. 2000. “The Contemplacion Fiasco: The Hanging of a Filipino Domestic Worker in Singapore.” A. M. Hilsdon, Martha Macintyre, Vera Mackie, and Maila Stivens eds. *Human Rights and Gender Politics: Asia-Pacific Perspectives*. pp.172–92.
- Holt, E. M. 1996. “Writing Filipina-Australian Brides: The Discourse on Filipina Brides.” *Philippine Sociological Review*. 44: 58–78.
- 石井由香 1995. 「国際結婚の現状——日本でよりよく生きるために」 駒井 洋 編 『講座外国定住問題 第2巻 定住化する外国人』 明石書店 pp. 75–102.
- 定松^{さだまつ} 文^{あや} 2002. 「国際結婚にみる家族の問題——フィリピン人女性と日本人男性の結婚・離婚をめぐる」 宮島喬・加納弘勝編 『変容する日本社会と文化』 東京大学出版会
- 嘉本伊都子^{かもといづこ} 2001. 『国際結婚の誕生〈文明国日本〉への道』 新曜社

- Makabe, T. 1995. *Picture Brides-Japanese Women in Canada*. Ontario: Multicultural History Society of Ontario.
- Kofman, Eleonore. 1999. "Female 'Birds of Passage' a Decade Later: Gender and Immigration in the European Union." *International Migration Review*. 33 (2) : 269-299.
- Lievens, John. 1999. "Family-Forming Migration from Turkey and Morocco to Belgium: The Demand for Marriage Partners from the Countries of Origin." *International Migration Review*. 33 (3) : 717-744.
- Nakamatsu, Tomoko. 2003. "International Marriage through Introduction Agencies: Social and Legal Realities of 'Asian' Wives of Japanese Men" Nicola Piper and Mina Roces eds. *Wife or Worker?: Asian Women and Migration*. Rowman & Littlefield publishers. pp. 181-202.
- 中村尚司 1994 「アジア人花嫁の『商品化』」中村尚司『人びとのアジア』岩波書店 pp. 17-47.
- Nakano Glenn, E. 1986. *Issei-Nisei, War Bride-Three Generations of Japanese American Women in Domestic Service*. Philadelphia: Temple University Press.
- OECD. 1998. *Trends in International Migration*. Paris: OECD.
- Parrenas, R.S. 2001a. *IServants of Globalization-Women, Migration and Domestic Work*. Stanford, Calif: Stanford University Press.
- . 2001b. "Mothering from a Distance: Emotions, Gender, and Inter-Generational Relations in Filipino Transnational Families." *Feminist Studies*. 27 (2) : 361-390.
- . 2001c. "Transgressing the Nation-State: The Partial Citizenship and 'Imagined Global Community' of Migrant Filipina Domestic Workers." *Signs* 26 (4) : 1129-1154.
- Penny, J. and Khoo, S. E. 1996. *Intermarriage—A Study of Migration and Integration*. Canberra: Australian Government Publishing Service.
- Piper, Nicola. 1997. "International marriage in Japan: 'Race' and 'Gender' perspectives." *Gender & Culture: A Journal of Feminist Geography*. 4 (3) :321-347.
- . "Labor Migration, Trafficking and International Marriage: Female Cross-Border Movements into Japan." *Asian Journal of Women's Studies*. 5 (2) : 69-99.
- Piper, N. and Ball, R. 2001. "Globalization of Asian Migrant Labor: The Philippine-Japan Connection." *Journal of Contemporary Asia*. 31 (4) : 533-554.
- Piper, Nicola. And Roces, Mina. 2003. "Introduction: Marriage and Migration in an Age of Globalization." Nicola Piper and Mina Roces eds. *Wife or Worker? Asian Women and Migration*. pp. 1-21.
- Pries, Ludger. 2001. "The Disruption of Social and Geographic Space: Mexican-US Migration and the Emergence of Transnational Social Spaces." *International Sociology*. 16 (1) : 55-74.
- Robinson, Kathryn. 1996. "Of Mail-Order Brides and 'Boys' Own' Tales: Representations of Asian-Australian Marriages." *Feminist Review*. 52: 53-68.
- Roces, Mina. 1996. "Filipino Brides in Central Queensland: Gender, Migration and Support Services." Denis Cryle, Graham Griffin, and Dani Stehlik eds. *Futures for Central Queensland*. Rockhampton: Rural Social and Economic Research Center, Central Queensland University. pp.145-152.
- . 1998. "Kapit sa Patalim (Hold on to the Blade): Victim and Agency in the Oral Narratives of Filipino Women Married to Australian Men in Central Queensland." *Lila. Asia Pacific Women's Journal*. 7: 1-19.
- . 2000. "Negotiating Modernities: Filipino Women 1970-2000." Louise Edwards and Mina Roces. *Women in Asia: Tradition, Modernity and Globalisation*. pp. 112-138.
- Saroca, N. 1997. "Filipino Women, Sexual Politics, and the Gendered Discourse of the Mail-Order Bride." *Journal of Interdisciplinary Gender Studies*. 2 (2) : 89-103.
- Sinke, S. M. 1999. "Migration for Labor, Migration for Love: Marriage and Family Formation across Borders." *Magazine of History*. Organizations of American Historians Fall: 17-21.
- Sharpe, P. 2001. *Women, Gender and Labor Migration-Historical and Global Perspectives*. London: Routledge.
- Tadiar, Neferti, Xina, M. 1997. "Domestic Bodies of the Philippines." *Sojourn*. 12 (2): 153-191.
- 田村雲供 1992 「南西アフリカ ドイツ領植民地への女性輸送」池本幸三編『近代世界における労働と移住』阿吡社 pp. 269-310.
- Truong, Dhanh-Dam. 1996. "Gender, International Migration and Social Reproduction: Implications for Theory, Policy, Research and Networking" *Asian and Pacific Migration Journal*. 5 (1): 27-52.

- Wang, Hong-zen. And Chang, Shu-ming. 2002. “The Commodification of International Marriages : Cross-border marriage Business in Taiwan and Viet Nam” *International Migration*. 40 (6): 93–116.
- Wijers, M. and Lap-Chew, L. 1997. *Trafficking in Women, Forced Labor and Slavery-like Practices in Marriage, Domestic Labor and Prostitution*. Utrecht: Foundation against Trafficking in Women.
- Yeoh, B. S. A., Graham. E., and Boyle, P. J. eds. 2002. “Special Issue-Migrations and Family Relations in the Asia Pacific Region.” *Asian and Pacific Migration Journal* 11 (1):1–11.